

會 務

土木學會誌 第十三卷第一號 昭和二年二月

- 大正十五年十一月二十四日役員會を開き市瀬、那波の兩副會長大河戸、島、茂庭、物部の各常議員中山、廣井、古市の各前會長井上、丹治の兩主事川口編輯委員長長野口同委員出席市瀬副會長議長席に着き下記事項を決議せり
- △大正十六年度收支豫算を承認すること
- △工學會より依頼に係る萬國工業會議に關する米國スペリー博士よりの通信及聲明書を最近發行の會誌に登載すること
- △常議員工學博士直木倫太郎君地方に轉任に付定款第十二條に據り會員樺島正義君を推薦すること
- △工學會より對萬國工業會議第一回評議員會に於て決議せられたる同協議員選出方照會ありたるに付本會に於ては中山、廣井の兩前會長を選出すること
- △鐵道協會より本會事務室を來る大正十六年一月限り明渡し方照會ありたるに付適當の移轉箇所を詮議すること
- 其他會務に關する事項
- 同年十一月三十日(火曜日)午後五時より東京市麹町區有樂町一丁目一番地帝國鐵道協會に於て第四十五回講演會を開催し下記の講演ありたり當日は市瀬副會長外役員、會員及會員外の者とも併せて百餘名の來聽者ありたり尙閉會後同所に於て晚餐會を開き多數會員の出席あり盛會裡に同八時過散會せり
- △東京より觀たる歐米の公園 東京市技師公團課長 井 下 清 君
- 同年十二月十日役員會を開き市瀬副會長大河戸、樺島、草間、島、眞島、物部の各常議員日下部、古市の兩前會長井上、丹治の兩主事川口編輯委員長長野口、山崎の兩編輯委員出席市瀬副會長議長席に着き下記事項を決議せり
- △定時總會は來る大正十六年一月十五日(土曜日)午後三時半より帝國鐵道協會に於て開催すること
- △贊助員男爵川崎寛美君逝去に付其嗣子男爵川崎寛明君を贊助員として承認すること
- 其他會務に關する事項
- 同年十二月十六日編輯委員會を開き川口委員長黒田、佐藤、平井の各委員出席會誌編輯上に付き協議を爲せり
- 昭和二年一月十二日役員會を開き市瀬副會長大河戸、樺島、草間、島、眞島、物部の各常議員日下部、古川の兩前會長井上、丹治の兩主事川口編輯委員長長野口、山崎の兩委員出席

市瀬副會長議長席に着き下記事項を決議せり

△大正十五、昭和元 年度中事業及決算の報告を承認すること

△同年度經費増減額流用方を承認すること

△同年度損益計算表を承認すること

△未納會費缺損處分案を承認すること

△會誌第十三卷第一號に黒梓並に奉悼文を掲ぐること

△故太田圓三君遺族弔慰金募集取扱者平山復二郎君より故工學士太田圓三君の記念として
金二千五百圓也の寄附申込ありたるに付本會は之を受納することとし挨拶狀を發するこ
と

△土木學會誌第十二卷第五號に掲載せる會員工學博士草間偉君の支線式無線電信柱に就て
の論文に對し大正十五年度第一土木賞牌を贈呈すること

其他會務に關する事項

上 記 挨 拶 狀 (一)

昭和二年一月十四日

社團法人土木學會

理 事	吉 村 長 策
同	市 瀬 恭 次 郎
同	那 波 光 雄

故太田圓三氏遺族弔慰金募集 取扱者 平 山 復 二 郎 殿

拜啓客年十二月二十四日付を以て故工學士太田圓三氏の記念として本會基金中に金貳千
五百圓也御寄附相成り正に受領仕候右は故工學士太田圓三君記念基金として本會基金に繰
入可仕候茲に本會を代表し謹みて謝意を表し候 敬具

同 上 (二)

昭和二年一月十四日

社團法人土木學會

理 事	吉 村 長 策
同	市 瀬 恭 次 郎
同	那 波 光 雄

太 田 陽 三 殿

拜啓時下愈御清穆の段奉慶賀候陳者今般故工學士太田圓三氏の記念として金貳千五百圓
也右遺族弔慰金募集取扱者平山復二郎氏より本會の基金中に御寄附相成り難有受領仕候右
は故工學士太田圓三君記念基金の名稱を附し永く保存可仕候右御報告旁御挨拶申上度如斯

御座候 敬具

土木學會定時總會議事概要

昭和二年一月十五日午後三時半東京市麹町區有樂町一丁目一番地帝國鐵道協會に於て定時總會を開く出席者會員、准員及學生員共合計九十五名にして會長代理市瀬副會長議長席に着き開會を宣し次で丹治事主大正十五年昭和元年度事業報告を井上主事同年度收支決算報告並に貸借對照表を代讀し何れも出席會員の承認を得たり

該報告及貸借對照表の全文は下記の如し

大正十五昭和元年度土木學會事業報告

理 事	吉 村 長 策
理 事	市 瀬 恭 次 郎
理 事	那 波 光 雄

大正十五昭和元年度中事業の概要を報告す

一 會 合

大正十五年一月十五日午後三時半東京市麹町區有樂町一丁目一番地帝國鐵道協會に於て定時總會を開く出席會員九十八名准員五名學生員四名合計百七名にして會長日下部辨二郎君議長席に着き事業及決算の報告を爲し次で會長の講演ありたり上記以外同年度中の會合は役員會十四回(内臨時三回)講演會四回編輯委員會十一回土木學會震害調査委員會七回東京市内外の高速度鐵道調査特別委員會三回なり

二 役員改選及職員就任

定款第十一條に據り會長日下部辨二郎君副會長岡野昇君常議員太田圓三君同後藤佐彦君同竹内季一君同八田嘉明君退任に付前項定時總會に於て改選を行ひ當選したる役員の氏名下記の如し

會 長	吉 村 長 策君
副會長	那 波 光 雄君
常議員	大 河 戸 宗 治君
同	直 木 倫 太 郎君
同	茂 庭 忠 次 郎君
同	物 部 長 穗君

同年同月二十二日規則第二十五條に據り職員の推薦を行ひ下記の通り就任せり

主 事	井 上 秀 二君
同	丹 治 經 三君

編輯委員長	川 口 愛 太 郎君
同 委員	黒 田 武 定君
同	佐 藤 利 恭君
同	野 口 寅 之 助君
同	平 井 喜 久 松君
同	谷 井 陽 之 助君
同	山 崎 匡 輔君

同年十一月二十四日常議員直木倫太郎君地方に轉任の爲辭任に付其後任として會員樺島正義君を推薦せり

三 代表者並に委員委囑

本會は國產振興會の趣旨に賛同し代表者として會長吉村長策君及副會長市瀬恭次郎君同那波光雄君を依囑せり

千九百二十九年我邦に開催の萬國工業者大會準備協議委員として本會は中山、廣井の兩前會長を依囑せり

四 奉悼の爲天機並に御機嫌奉伺

昭和元年十二月三十一日副會長市瀬恭次郎君參内の上本會會員を代表し奉悼の爲天機並に御機嫌を奉伺せり

五 調 査 事 項

前年度中より調査中なりし土木學會震害調査委員會は第六部(道路)を除くの外調査を遂げ第一卷は既に發刊第二卷は印刷中にして第三卷の内前記第六部及東京市内外高速度鐵道調査委員會は尙引續き調査審議中なり

六 會 誌 及 震 害 調 査 報 告 發 行

大正十五昭和元年度中會誌第十二卷第一號より同第六號迄及震害調査報告第一卷並會員名簿を發行せり

七 前 常 議 員 の 逝 去

前常議員太田圓三君は大正十五年三月二十一日逝去したるに付本會に於ては弔詞及玉串料を靈前に供せり

八 登 記 事 項

大正十五年一月十六日の定時總會に於ける理事の改選及資産の總額を金八萬九千九百貳圓貳拾八錢と變更の件は同月二十五日何れも其登記を了せり

九 土 木 賞 牌 贈 呈

土木學會誌第十一卷第五號に掲載せる會員大河戸宗治君の拱橋の設計に就ての論文に對し

大正十四年度第一土木賞牌を贈呈せり

一〇 視 察 旅 行

大正十五年五月十五日及十六日の兩日に涉り内務省施行の利根川及江戸川改修工事其他視察旅行を爲し會員六十二名の参加ありたり

一一 寄 附 金 の 受 領

同年十二月二十四日故工學士太田圓三君遺族弔慰金募集取扱者平山復二郎君より故工學士太田圓三君の記念として金二千五百圓也の寄附申込ありたるに付之を受領し故工學士太田圓三君の記念基金の名稱を附し本會基金に編入せり

一二 賛 助 員 薨 去 並 に 賛 助 員 承 認

同年九月六日賛助員川崎工場主男爵川崎寛美君薨去に付同年十二月十日右嗣子男爵川崎寛明君を更に賛助員として承認せり

一三 會 員 數

大正十五昭和元年度中の入會者は會員百四十二名准員二百二十六名學生員百二十七名にして合計四百九十五名退會者は會員五名准員百〇九名學生員四十名合計百五十四名死亡者は會員九名准員十名學生員三名合計二十二名にして昭和元年十二月末日に於ける現在數は會員千十一名准員千六百〇七名學生員二百〇八名合計二千八百二十六名なり

大 正 十 五 年 昭 和 元 年 度 土 木 學 會 決 算 報 告

理 事 吉 村 長 策
理 事 市 瀬 恭 次 郎
理 事 那 波 光 雄

收 支 計 算

收 入 の 部

科 目	金 額	摘 要
○會 費	34,438.84	
內 會 員 會 費	14,900.00	
准 員 會 費	18,131.60	
學 生 員 會 費	1,407.24	
○利 子 及 雜 收 入	4,296.87	
內 預 金 利 子	260.86	
基 金 利 子	2,321.73	
雜 入	714.28	

○入	會	金	2,062.00
內	會員入會金		795.00
	准員入會金		989.00
	學生員入會金		278.00
○會費一時納付金			680.00
○震害調査費殘金			1,875.72
○震害調査書收入			11,637.39
合	計		54,990.82

支 出 の 部

○事	務	費	13,309.02
內	通 信 費		299.93
	俸給諸給手當		7,263.00
	事務室及會場費		1,753.00
	消 耗 品 費		56.48
	諸 印 刷 費		1,280.63
	振替貯金料		787.54
	雜 費		1,868.39
○會	誌	費	13,321.96
內	會誌印刷費		11,173.70
	速 記 費		70.00
	酬 譯 費		53.00
	製 圖 費		172.37
	運 送 費		1,396.66
	雜 費		456.23
○會		費	200.00
	寄 附 金		1,000.00
○臨	時	費	1,069.90
○圖	書及備品費		125.60
○基	金 = 編入金		680.00
○基	金 = 返金		7,327.36

高速度委員會費 132.90
 東京橫濱交通調査報告印刷代
 837.00
 鐵道協會増築寄付金 100.00

{ 9年度2,809.71 11年度310.03
 10年度3,954.80 12年度252.77

○震 害 調 査 費	3,784.60	
○震害調査書印刷費	6,266.58	
○翌年度へ繰越金	8,905.71	
合 計	54,990.82	
	基 金 計 算	
	收 入 の 部	
○前 年 度 繰 越 金	74,746.19	
内 古市沖野 兩博士基金	16,475.13	
故白石博士 記念基金	14,144.19	
故山崎博士 記念基金	1,646.76	
廣井博士土木賞牌基金	450.38	
原 田 博 士 基 金	2,701.06	
廣井博士還曆記念基金	6,308.28	
小川博士 記念基金	1,037.36	
故富田博士記念基金	516.33	
故石黒博士 記念基金	6,260.32	
故近藤博士 記念基金	3,776.37	
基 金	15,687.42	本會積立分
故中島博士 記念基金	3,000.00	
故阪田貞明君記念基金	1,054.26	
故岡崎博士 記念基金	1,688.33	
○基 金 = 編 入 金	680.00	會費一時納付金
○故太田圓三君記念基金	2,500.00	
○利 子 收 入	3,536.21	
内 古市 沖野 兩博士 基金利子	930.87	
故白石博士基金利子	825.64	
故山崎博士基金利子	87.96	
廣井博士土木賞牌基金利子	26.98	
原 田 博 士 基 金 利 子	161.89	
廣 井 博 士 基 金 利 子	377.75	
小川博士基金利子	60.00	
故富田博士基金利子	30.00	

故石黒博士基金利子	350.00
故近藤博士基金利子	214.72
故中島博士基金利子	180.00
故 阪田貞明君 基金利子	62.50
故岡崎博士基金利子	100.00
基 金 利 子	127.90
合 計	81,462.40

支 出 の 部

○經常費 = 組入金	2,321.73	{利子の三分の二 {(近藤博士分二分の一)}
○翌年度へ繰越金	79,140.67	{本年度利子三分の一を各基金 {に編入せるもの}
内 古市 内 沖野兩博士還暦記念基金	16,785.42	
故 白石博士 記念基金	14,419.40	
故 山崎博士 記念基金	1,676.07	
廣井博士土木賞牌基金	459.37	
原 田 博 士 基 金	2,755.02	
廣井博士還暦記念基金	6,434.19	
小川博士還暦記念基金	1,057.36	
故 富田博士 記念基金	526.33	
故 石黒博士 記念基金	6,376.98	
故 近藤博士 記念基金	3,883.73	此分利子二分の一基金編入
故 中島博士 記念基金	3,060.00	
故阪田貞明君記念基金	1,075.09	
故 岡崎博士 記念基金	1,721.66	
故太田圓三君記念基金	2,500.00	
基 金	16,410.05	
合 計	81,462.40	

繰 越 金 内 譯

○各基金繰越高	79,140.67
○外 = 繰越金	8,905.71
計	88,046.38

内 譯

有價證券	53,906.40	{五分利公債額面六萬千六百圓 貯金局及三菱銀行保管
當座預金	20,592.86	三菱銀行
定期預金	4,500.00	同上
郵便貯金	2,781.90	
振替貯金	6,132.55	
現金	132.67	

貸借對照表

貸方 (負債ノ部)		借方 (資産ノ部)	
古市兩博士還曆記念基金	16,735.42	圖書及備品	3,152.36
沖野白石博士記念基金	14,419.40	假拂金	100.00
故山崎博士記念基金	1,676.07	未収入金	10,209.77
廣井博士土木賞牌基金	459.37	有價證券	53,906.40
原田博士基金	2,755.02	定期預金	4,500.00
廣井博士還曆記念基金	6,434.19	當座預金	20,592.86
小川博士還曆記念基金	1,057.36	郵便貯金	2,781.90
故富田博士記念基金	526.33	振替貯金	6,132.55
故石黒博士記念基金	6,376.98	現金	132.67
故近藤虎五郎博士記念基金	3,883.73		
故中島博士記念基金	3,060.00		
故阪田貞明君記念基金	1,075.09		
故岡崎博士記念基金	1,721.66		
故太田圓三君記念基金	2,500.00		
基金	16,410.05		
翌年度へ繰越金	22,367.84		
合計	101,508.51	合計	101,508.51

財産目録

貸借對照表資産の部と同一に付省略す

次に役員の変更を行ひ會長の指命せる開票立會人加賀山學君田村與吉君藏重哲三君は投票紙二百七十三通の開票を爲したり當選役員及會長四票副會長七票常議員三十七票以上の得點者は次の如し

會 長

二百三十九票 (當選)

六票

六票

四票

副 會 長

百九十一票 (當選)

十票

九票

九票

七票

常 議 員

九十二票 (當選)

六十四票 (當選)

四十八票 (當選)

四十六票 (當選)

四十六票

四十一票

四十票

三十七票

三十七票

市 瀬 恭 次 郎君

丹 羽 鋤 彦君

岡 野 昇君

岡 田 竹 五 郎君

井 上 秀 二君

八 田 嘉 明君

安 藝 谷 一君

中 川 吉 造君

眞 島 健 三 郎君

青 山 士君

大 岡 大 三君

井 上 範君

加 賀 山 學君

中 村 謙 一君

小 川 織 三君

近 新 三 郎君

那 須 章 彌君

永 山 彌 次 郎君

上記役員改選開票中に會長講演あり終りて議長より開票の結果を發表し午後五時閉會せり續て鐵道技師木村芳人君の旅客停車場建設に就ての講演並活動寫眞の映寫あり同八時より晚餐會に移り六十餘名の出席者あり盛會裡に同九時過散會せり

○同年同月二十日臨時役員會を開き市瀬會長井上、那波の兩副會長大岡、大河戸、樺島、井上、物部、茂庭の各常議員中山前會長丹治主事川口編輯委員長出席市瀬會長議長席に着き下記事項を決議せり

△主事井上秀二君副會長に當選並編輯委員平井喜久松君同山崎匡輔君同谷井陽之助君任期滿了退任に付其後任として主事に會員村幸長君を又編輯委員に會員田中豐君同高橋甚也君同古川淳三君を其他の職員は全部引續き前任者を推薦すること

其他會務に關する事項

○同年同月二十五日東京區裁判所に於て理事の改選及資産の總額變更の登記を了せり

- 同年同月二十一日土木學會誌第十二卷第五號發行成規の届出を爲し同二十二日各會員に配付せり
- 同年同月二十五日震害調査報告第二卷發行成規の届出を爲し同二十六、七兩日に涉り各應募者に配付せり
- 同年二月十八日土木學會誌第十二卷第六號發行成規の届出を爲し同十九日各會員に配付せり

●金森前常議員の逝去
 前常議員工學博士金森鐵太郎君は昭和二年一月二十六日逝去に
 付本會に於ては靈前に生花一對及弔詞を呈せり

○下記の諸氏は退會せられたり

准 員			
河 部 隆 徳君	伊 藤 春 太 郎君	伊 藤 雅 雄君	
太 田 豊君	加 藤 通 綏君	河 合 惣 平君	
松 崎 丑 藏君	村 本 武君	若 林 邦 治君	
渡 邊 秋 雄君			

○大正十五年十一月十六日以降昭和二年一月十五日迄に入會を承認し名簿に登録したるもの

下記の如し (○印は准員より△印は學
 生員より轉じたるを示す)

會 員 (九 名)			
○青 崎 秀 雄君	上 野 正 一君	○小 田 秀 吉君	
山 東 功君	武 澤 源 一君	○伏 島 信 九 郎君	
前 田 奥 藏君	諸 岡 明 七君	○渡 邊 甲君	
准 員 (二 十 名)			
淺 井 次 三 郎君	秋 葉 滿 壽 次君	△上 野 正 夫君	
風 間 武 雄君	川 口 保 一君	△河 野 爲 二君	
桑 木 權 衛君	古 賀 秀 衛君	清 水 忠 雄君	
杉 浦 朝 太 郎君	△關 部 三 郎君	△富 田 龍 一 郎君	
中 山 光 治君	野 上 磯 市君	橋 本 重 記君	
水 間 榮 之 助君	山 口 利 兵 衛君	横 井 義 政君	
△劉 作 樞君	若 槻 章 一君		
學 生 員 (十 八 名)			

芦田英太郎君	五十嵐秀夫君	石黒重國君
江藤禮君	金津尙一君	菊地新吉君
桑原竹二君	栗林忠雄君	越塚寛三君
後町徳太郎君	蘭頭元二君	鶴岡鶴吉君
寺戸善之君	南部輝胤君	藤井松太郎君
前田藤介君	山神斐夫君	山本與一郎君

○大正十五年十一月十六日以降昭和二年一月十五日迄に寄贈及交換を受けたる雑誌其他下記二十九種なり

寄贈を受けたる分

東京工學會會員名簿	一冊	東京工學會
土木建築資料通信 自第一一六號至第一一九號	四冊	土木建築資料通信社
滿洲技術協會誌 第三卷第一六號第四卷第一七號	二冊	滿洲技術協
駿工 第二卷第一二號及第三卷一、二號	三冊	日本大學高等工學校 駿工會
電氣タイムス 第二卷第一二號及第三卷第一、二號	三冊	電氣タイムス社
Excarnating Engineer Vol. XX No. XI & No. XII	二冊	三井物産機械部
工事畫報 第二卷第一二號及第三卷第一、二號	三冊	工事畫報社
三菱電氣機第二卷第一二號及第三卷第一號	二冊	三菱電機株式會社 神戶製作所
神戸高等工業學校紀要 第一卷	一冊	神戸高等工業學校
名古屋工業會々報自第四四號至第四六號及同會員名簿	四冊	名古屋工業會
建設 第二卷第一二號及第三卷第一、二號	三冊	建設社
土木建設雜誌 第五卷第一二號及第六卷第一、二號	三冊	シビル社
帝國學士院紀事 第二卷第八、九及第三卷第一號	三冊	帝國學士院
照明學會々員名簿	一冊	社國法人照明學會
電氣製鋼 第二卷第一二號及第三卷第一號	二冊	電氣製鋼研究會
高森線立野橋梁架設工事畫報	一冊	鐵道省熊本建設事務所
東洋建築材料商報 第一七年一、二月號	二冊	東京建材商報社
啓明會 第一九回講演集	一冊	啓明會
仙臺高等工業學校紀要 第五冊第二號	一冊	仙臺高等工業學校
工業 第六、七號	二冊	大阪工業會
工政 第八六號及第八七號	二冊	工政會
早稻田理工學會會員名簿	一冊	早稻田理工學會

交換の分

鐵と鋼 第一二卷第一〇號及同附録第二回講演大要	二冊	日 本 鐵 鋼 協 會
造船協會雜誌 自第五六號至第五八號及 造船協會報 第三九號並名簿	五冊	造 船 協 會
建築雜誌 十一月號及名簿	二冊	建 築 學 會
機械學會誌 第二九卷一一六號及 第三〇卷第一一七號	二冊	機 械 學 會
工業化學雜誌 第三十編第一及第二冊	二冊	工 業 化 學 會

會員原口要君は昭和二年一月二十四日 准員内山武君は大正十五年十二月十三日 同關一夫君は同年十一月十四日 同富澤精司君は同年十月死去せられたり本會は哀悼の意を表す

會 告

昭和四年我國に開催せらるべき萬國工業會議に關し米國スペリー博士よりの通信並聲明書寫工學會より送付ありたり其全文下記の如し。

大年十五年十一月廿二日

工 學 會

土 木 學 會 長 殿

萬國工業會議に關する米國スペリー博士の通信並聲明書寫送付の件

拜啓 萬國工業會議に關し去る十月十五日若槻内閣總理大臣より言明せられたる閣議決定の次第は即日在米加茂博士に電報し「スペリー」博士其他へも傳言方依頼致置候處該電報は翌十六日恰も歐洲より歸朝の途次米國に在りたる加茂氏の入手する處となり同月廿日各學會代表者により催されたる同氏招待會の席上右電報を披露せられたる處列席の諸氏は非常なる感謝を以て之を迎へ直に全米の技術者に對する激勵的聲明書を起草し全米各工學會へ配布することゝ相成候趣別紙寫の通今般「スペリー」博士より通信に接し候

尙又加茂博士よりも同聲明書寫を一書に添へて送越し其書面には招待會當日の狀況を詳細記述あり候就ては同聲明書は普く我國の工學者へ速報致度候故御手数ながら最近御刊行となるべき貴會の會誌、雜誌類へ御登載被下候様相願候 敬 具

October 25, 1926.

Baron K. Furuichi, President,
Kogakukwai,
Nakadori, Marunouchi,
Tokyo, Japan.

My Dear Baron Furuichi:

Since the receipt of the cablegram sent by yourself, Dr. Dan and Baron Shiba, activities have been in progress which culminated in Dr. Kamo's arrival on these shores from Europe. Knowing that his coming was so imminent, we withheld response until his report was in our hands, and farther action could be taken on the part of our engineers here.

It was certainly most timely that just before the luncheon that was tendered in honor of Dr. Kamo by representatives of all our engineering societies here, he should be in receipt of the great news that your Government has in its wisdom seen fit to sponsor this worthy cause. We feel that great

good will follow from such a meeting as is contemplated and it will be our endeavor from now until 1929 to make every arrangement possible to assure a large and enthusiastic attendance of our eminent engineers.

For your information I am enclosing a statement prepared at the luncheon, which is to be sent to all engineering societies in the United States.

Congratulating you on your part in the excellent progress that has been made, and with cordial regards, I beg to remain,

Sincerely Yours,

Elmer A. Sperry. (Signed)

To The Engineers of America.

For the past two years there has been a growing sentiment in favor of obtaining first-hand information, by actual inspection and otherwise, of the marvelous advance and achievement of engineering in Japan.

In 1911 when engineering in Japan was in its more formative stages, the Mining engineers responded to an invitation to visit that country and come back full of enthusiasm as to the wonderful reception that they had received and the progress that had been made in mining in that country.

This has lingered in the minds of the participants, and incited a contagious interest in those to whom it has been conveyed, which has now extended to include all branches of engineering.

Within the past three years this thought has been crystalized by the wonderful acumen of the Japanese engineers who have visited our shores; notably the coming of Dr. M. Kamo, president for the second time of the Society of Mechanical Engineers, the great national engineering body of Japan consisting of about 5000 members, head of the Department of Mechanical Engineering at the University of Tokio and president of other engineering bodies. His coming was seized upon to ascertain the attitude of his compatriots toward the holding of an international engineering conference in Japan. After consultation with the engineering authorities of his country Dr. Kamo reported that the suggestion had been received with enthusiasm, and on his return to America from the World Power Conference at London in 1924 farther advance was made.

On reaching Japan the interest of the government was solicited. In the interim the matter was taken up in a similar manner in the United States through discussions between the officers of the five engineering societies, namely, The American Society of Civil Engineers, The American Society of Mechanical Engineers, The American Institute of Electrical Engineers, The American Institute of Mining and Metallurgical Engineers, and the Society of Naval Architects and Marine Engineers and with no other than our engineer member of the president's cabinet in Washington Hon. Herbert Hoover, Secretary of Commerce from whose response the following is a quotation:

"I am entirely sympathetic with the idea of a World Congress of Engineers in Japan. I think it would be a well deserved compliment to the progress made in Japan for the engineers of the world to send representation to such a conference."

It is our great pleasure to announce that Dr. Kamo on his way home from the World Power Conference at Basle brings the latest reports of progress on this matter in Japan in the important announcement of the support and endorsement of the government of Japan, briefly stated in the following cablegram, reaching him here on Saturday last (Oct. 16).

"Congress subsidy passed cabinet Friday. Prime Minister has given dinner prominent industrial people. On that occasion he and Minister of Dept. of Commerce and Industry explained Government resolution and expressed their desire of cooperation. Communicate Sperry and others."

At a luncheon at the Engineers' Club tendered to Dr. Kamo today (Oct. 20) representatives of the following societies were present: American Society of Civil Engineers, American Society of Mechanical Engineers, American Institute of Electrical Engineers, American Institute of Mining & Metallurgical Engineers, Society of Naval Architects and Marine Engineers, United Engineering Society, Engineering Foundation, American Engineering Council, Taylor Society, and this luncheon became the medium of the receipt of formal invitation from Japan to participate in an engineering conference to be held in Japan in the Fall of 1929 which was enthusiastically received by all present who authorized this statement.

In anticipation of the receipt of formal individual invitations all engineering societies are encouraged to take such action as will lead to the fullest possible participation in this unique event.

新入會者にして既刊會誌希望者に告ぐ

本會々誌は新入會者には入會の月より以降發行に係るものより配付致すべくに付其の以前の會誌御希望の場合には一部に付下記金額振替口座東京一六八二八に拂込用紙通信欄に其旨記入請求せられたし

残 部 内 譯

第五卷一號二號	一部金 壹 圓
第六卷三號六號	同 金 壹 圓
第七卷二號三號四號	同 金壹圓五拾錢
第八卷一號	同 金 貳 圓
第九卷一號二號三號五號六號	同 金 貳 圓
第十卷一號二號三號四號五號六號	同 金 貳 圓
第十一卷二號六號	同 金 貳 圓
第十二卷二號(附録付)三號	同 金貳圓五拾錢
第十二卷二號四號五號六號	同 金 貳 圓
東京市内外交通に關する調査書	同 金 參 圓
大阪市内外高速度鐵道調査會報告書	同 金 壹 圓
土木學會誌索引	同 金 五 拾 錢

本會會員轉居又は旅行の場合の注意

會員の宿所の不明なるときは會誌の配付を始め其他通信上に差支候に付御轉居の際は至急明細に御通知相成度又御旅行等にて御不在となるも會費支拂には差支なき様御配慮相成たし

會 費 納 付 に 付 注 意

本會々費は下記の通りにして本會より發する振替集金に對し必ず御支拂の事若し此の集金書へ十五日間中三回の取立金支拂なき場合は最寄郵便局に就き本會振替口座東京一六八二八番に(拂込用紙通信欄に會費たる事を記入の事)御拂込相成尙整理の都合有之候に付會費一時納付の御豫定又は其の他の都合に依り支拂なき場合は直に御通知相成たし

朝鮮滿洲の一部及び青島等振替貯金を取扱はざる地に居住せらるゝ會員は納期の翌月末頃迄集金を受けざるときは爲替其他の方法に依り直ちに御送金相成たし

會員種格	會 費 年 額	自一月 至四月 第一期分二月徴收	自五月 至八月 第二期分六月徴收	自九月 至十二月 第 三 期 分 十 月 徴 收
會 員	金 拾 八 圓	金 六 圓	金 六 圓	金 六 圓
准 員	金 拾 貳 圓	金 四 圓	金 四 圓	金 四 圓
學 生 員	金七圓五拾錢	金貳圓五拾錢	金貳圓五拾錢	金貳圓五拾錢

新に入會したるものは月割計算とし入會の翌月集金を發す

會 費 未 納 に 付 注 意

會費は從來年額を第一期第二期第三期に分割し毎年二月六月十月に振替貯金郵便として取立方を郵便局に依託の處往々集金郵便に對して故なく支拂を拒絶し尙他の方法に依りても送金なき者あれ共斯くては會費滞納者として遺憾ながら規則第十三條第一項に依り遂に會誌の配付を停止せらるゝに至るべく又本會に於ても未納金督促の手數一通ならず故に今後右様のことなき様特に御留意の上集金郵便に御拂込相成たし

會 誌 未 着 の 場 合 の 注 意

會誌は毎年二月四月六月八月十月十二月(印刷又は原稿等の都合に依り翌月上旬配付の事あり)に發行し漏なく配付すべくに付翌月未着の場合には一應本會に御照會相成たし從來往々發行後數ヶ月經過して照會せらるゝ向あるも斯くては殘部皆無となり遺憾ながら配付不可能のことあるべきに付御留意相成たし

領收報告 自大正十五年十一月一日起至大正十五年十二月三十一日 間受付分 (受付順)

會員大正十四年度第一期分會費

金 六 圓 土肥 憲二 郎君

會員大正十四年度第二期分會費

金 六 圓 土肥 憲二 郎君

會員大正十四年度第三期分會費

金 六 圓 保科 圭三 郎君 齋 藤 固君

會員大正十五年度第一期分會費

金 六 圓 土肥 憲二 郎君 保科 圭三 郎君 齋 藤 固君

金 澤 孝 助君

會員大正十五年度第二期分會費

金 六 圓 土肥 憲二 郎君 保科 圭三 郎君

會員大正十五年度第三期分會費

金 六 圓	楠 田 九 郎君	溝 口 親 種君	桑 邱 茂君
西 川 總 一君	淺 見 東 三君	遠 藤 守 一君	高 山 節 繁君
岩 井 宇 一 郎君	志 賀 橋 介君	有 光 兎 茂 喜君	櫻 井 哲 三君
佐 藤 利 恭君	廣 石 一 匡君	三 好 貞 七君	三 原 村 久君
武 藤 吉 治君	吉 富 義 助君	有 元 岩 鶴君	奧 村 簡 二君
小 池 啓 吉君	坪 井 豐 彦君	中 川 幸 太 郎君	古 山 山 癸 一君
堀 尾 豐 熊君	松 島 寛 三 郎君	吉 田 德 次 郎君	君 島 八 郎君
中 島 洋 吉君	三 瀬 幸 三 郎君	伊 藤 長 右 衛 門君	木 原 英 一君
山 領 貞 二君	清 水 濶君	田 中 貞 次君	八 島 茂 君
田 淵 壽 郎君	上 原 惠 油君	庄 野 卷 治君	野 方 寅 吉君
都 々 木 春 美君	景 山 賢君	原 田 信 作君	佐 橋 信 一君
本 島 正 輔君	吉 野 德 一 郎君	岡 村 信 三 郎君	安 田 靖 一君
中 川 政 次 郎君	西 門 善 三 郎君	海 野 斐 雄君	平 川 保 一君
金 澤 孝 助君	露 口 秀 夫君		

會員昭和二年度第一期分會費

金 六 圓 山 本 格君

會員昭和二年度第二期分會費

金 六 圓 山 本 格君

會員昭和二年度第三期分會費

金 六 圓 山 本 格君

准員大正十二年度第三期分會費

金 四 圓 高 坂 征 支君

准員大正十三年度第一期分會費

金 四 圓 矢 野 藤 太君 高 坂 征 支君

准員大正十三年度第二期分會費

金 四 圓 岸 本 日 出 次 郎君

金 貳 圓 岸 波 彦 重君

准員大正十三年度第三期分會費

金 四 圓 大 村 四 郎君 岸 波 彦 重君

准員大正十四年度第一期分會費

金 四 圓 坂 田 治 八君 後 藤 量 介君 齋 藤 欽 一君
岸 波 彦 重君

准員大正十四年度第二期分會費

金 四 圓 岩 岡 武 博君 中 村 猛君 富 安 寛君
金 參 圓 中 明 宅 次君

准員大正十四年度第三期分會費

金 四 圓 三 橋 寛 之君 田 中 長 吉君 岩 岡 武 博君
末 綱 哲 太 郎君 廣 川 憲 二 郎君 佐 野 俊 男君 勝 目 清 二君
荻 野 竹 四 郎君 遠 藤 竹 三 郎君 北 原 嶮 君 瀧 谷 順 作君
樞 部 保 君 中 明 宅 次君 重 松 才 吉君 矢 島 濟 君
土 井 正 中君 松 浦 康 秋君 河 戶 萬 吉君

准員大正十五年度第一期分會費

金 四 圓 岸 本 日 出 次 郎君 金 馬 庚 子 郎君 水 庭 了 君
海 老 季 美 君 渡 邊 秋 雄 君 濱 田 稔 君 吉 岡 文 政 君
佐 崎 稔 君 末 綱 哲 太 郎君 廣 川 憲 二 郎君 羽 成 豐 君
渡 邊 甲 君 濱 地 辰 助 君 椎 名 熊 太 郎君 柏 原 清 助 君
櫻 庭 謙 三 君 加 藤 聰 郎君 田 中 種 雄 君 新 井 俊 君
木 村 富 治 郎君 吉 越 康 治 君 安 見 伊 之 助 君 勝 目 清 二 君
熊 川 信 之 君 後 藤 一 三 君 佐 藤 健 一 郎君 廣 田 孝 一 君
今 村 貫 三 君 長 島 清 松 君 水 野 鉉 三 君 大 谷 保 藏 君
加 藤 三 十 郎君 坂 田 昌 亮 君 志 內 時 彦 君 速 水 隆 三 君
濱 本 齊 肅 君 清 水 熊 雄 君 草 川 清 康 君 重 松 才 吉 君
矢 島 濟 君 日 比 野 武 雄 君 松 浦 康 秋 君 藤 原 琢 而 君
河 戶 萬 吉 君
金 參 圓 齋 藤 朴 君 金 澤 義 之 介 君 石 井 武 君
丹 羽 健 藏 君 平 塚 明 君 宮 下 眞 澄 君 立 川 時 雄 君
平 賀 榮 治 君 永 井 時 一 君 青 柳 貞 世 君 吉 永 整 三 君
松 島 孝 君 古 川 一 郎君
金 貳 圓 海 保 亨 君 城 內 清 太 郎君
金 壹 圓 佐 々 木 德 太 君 西 山 弘 資 君 細 井 吉 治 郎君

准員大正十五年度第二期分會費

金 四 圓 金 馬 庚 子 郎君 村 山 平 之 助 君 三 橋 寛 之 君
濱 崎 惣 五 郎君 下 川 與 市 君 後 藤 安 之 君 森 志 計 理 君
濱 田 稔 君 佐 崎 稔 君 末 綱 哲 太 郎君 羽 成 豐 君
幡 野 宗 明 君 張 昌 照 君 北 村 嘉 太 郎君 阿 部 一 郎君
中 川 一 美 君 濱 地 辰 助 君 椎 名 熊 太 郎君 柏 原 清 助 君
櫻 庭 謙 三 君 佐 野 俊 男 君 加 納 次 郎君 長 濱 時 雄 君
勝 目 清 二 君 片 岡 幡 君 後 藤 一 三 君 坂 田 治 八 君

中尾光信君	今村貫三君	後藤久吉君	島田善稻君
水野鉉三君	濱本齊齋君	增比野武雄君	大內勇君
與田喜知藏君	白崎水政實君	日村國治君	淺野薰君
金參貳圓	田邊里市君		

准員大正十五年度第三期分會費

金四圓	氏家文彌君	松原祐一君	黑宮富四郎君
美野君造君	白石子眞男君	青木目清二君	安宅光男君
明石野益二君	佐藤屋尙亮君	清水幸一實君	木村勝好君
小高木精一君	土井吉治郎君	直山滿三君	永村修吉君
廣森河眞君	細邊岡良太郎君	颯海老東功君	有荒馬英多馬君
阿部立正俊君	有飯今飯塚之助君	安雨岩嶺安藏君	荒磯市川覺通君
足市伊岩池稻牛上太小奧大橋小大加片楠久近近小小佐櫻笹	江井田崎田葉奧野誠是宗安內政藤岡仙之保藤暮林藤井島宮	岩崎田葉奧野誠是宗安內政藤岡仙之保藤暮林藤井島宮	市川葉藤上江原津山田島鐵合田刈林坂々藤本石戸
伊岩池稻牛上太小奧大橋小大加片楠久近近小小佐櫻笹	江井田崎田葉奧野誠是宗安內政藤岡仙之保藤暮林藤井島宮	岩崎田葉奧野誠是宗安內政藤岡仙之保藤暮林藤井島宮	市川葉藤上江原津山田島鐵合田刈林坂々藤本石戸

君二君次君雄君浩君雄君道君重君八君康君三君一君七君太君男君治君平君次君重君三君實君一君司君郎君吉君一君
太郎君 健勝與猛秀太誠喜川榮清末鏡佐太武北康良治芳重三篤要三代原三才清龍
木健陽中橋中葉口鐵所田岡瀨掛山尾谷浦田藤名田越邊川上藤田木地喜原卯小松馬
鈴鈴千田高田千津富外長原廣藤丸松水三水武山山吉渡石池遠岡樽加菊熊佐佐左重鈴相
木陽中橋中葉口鐵所田岡瀨掛山尾谷浦田藤名田越邊川上藤田木地喜原卯小松馬

君一君雄君德君三君源君次君一君吉君悅君而君一君二君則君吉君助君勇君承君三君平君次君四君兵君衛君之君正君清君一君
志君 正一經慶三俊義 軍政種典 琢秀孝真忠保 鐵和一之樵貫良隆 嘉義敏 義周 邦寬
崎原田橋村口橋岡田永田島中谷原莊村浦川野龍上木本山金樵貫良隆 嘉義敏 義周 邦寬
杉管瀨高田谷高鶴戶德永中野長藤本松宮水御村八山山橫若秋今石上小荻小木熊高佐佐志鈴染

君君助君雄君君式君郎君悌君寬君介君夫君義君治君治君潔君昭君一君次君正君億君雄君助君一君一君一君
利市君 文清春太侃三太 安正保征重軍直齡義 三上尾兵乙女口田大松上野口信合良正雅直季
雄市君 文清春太侃三太 安正保征重軍直齡義 三上尾兵乙女口田大松上野口信合良正雅直季
山浦谷木田武多辻寺富友長沼秦古兵丸松三三三村森八山吉和有伊井上小尾河栗小佐坂佐鈴關
杉杉關高田武多辻寺富友長沼秦古兵丸松三三三村森八山吉和有伊井上小尾河栗小佐坂佐鈴關

君君一君爾君夫君市君三君基君久君松君樹君助君朔君次君悠君治君三君保君一君三君二君君隆君甫君助君司君喜君勇君郎君
介郎君 太小廣英里四格 嘉芳清茂 彌之正榮 義正敬益兵米熊二政源 龍辰 西井 外丈久
鏡太小廣英里四格 嘉芳清茂 彌之正榮 義正敬益兵米熊二政源 龍辰 西井 外丈久
山廣柄廣英里四格 嘉芳清茂 彌之正榮 義正敬益兵米熊二政源 龍辰 西井 外丈久
杉鈴鋤關瀧田辰堤坪德富長奈塙平藤松增水三宮村村山山吉新伊伊石岡大折菅喜小酒笹坂鈴杉

瀧	尾	遠	也	谷	辨	尋	木	規	一	田	邊	平	學
高	桑	敬	君	高	貞	龍	田	直	君	谷	口	忠	君
津	路	嘉	君	土	源	友	永	染	君	富	惠	四	君
戶	田	田	君	仲	山	中	末	郁	二	中	野	爭	君
中	原	武	君	長	島	長	尾	金	次	丹	羽	健	君
西	田	精	君	野	本	乘	田	廉	平	野	原	政	君
濱	田	陽	君	林	有	長	川	四	君	林	爲	藏	君
花	次	郎	君	平	賀	廣	龜	久	雄	福	田	武	君
細	貫	一	君	松	下	松	勸	次	郎	松	田	亮	君
真	隆	介	君	松	喜	三	好	武	夫	水	野	廣	君
向	延	太	君	諸	山	門	澤	利	三	山	田	庫	君
矢	野	藤	君	山	崎	山	形	鐘	太	山	田	耕	君
山	幸	綱	君	吉	部	吉	岡	文	政	山	野	彌	君
波	井	榮	君	阿	八	東	倉	太	郎	味	本	恒	君
新	田	益	君	麻	洲	石	田	二	郎	有	伊	藤	君
栗	藤	忠	君	荒	幹	飯	田	正	熊	伊	尾	了	君
伊	之	助	君	東	三	稻	田	隆	君	飯	見	尙	君
飯	光	也	君	浦	清	內	藤	博	君	逸	林	達	君
磯	也	愛	君	松	鹿	遠	卯	憚	君	海	老	政	君
梅	善	嚴	君	井	鷹	大	正	八	君	大	野	健	君
江	石	靜	君	崎	義	大	民	信	君	大	山	大	君
大	川	謙	君	木	次	太	俊	夫	君	小	山	壽	君
小	常	吉	君	大	三	神	種	太	君	上	地	經	君
川	吉	君	君	河	貴	川	子	藏	君	菊	田	隆	君
北	君	君	君	川	小	金	英	吉	君	熊	水	尙	君
桑	樹	君	君	木	五	小	佐	君	君	小	智	一	君
近	太	君	君	小	茂	後	時	君	君	越	井	秀	君
齋	耶	君	君	志	鐵	志	良	君	君	白	如	太	君
清	君	君	君	鈴	教	關	覺	君	君	善	代	隆	君
園	智	君	君	田	一	田	和	平	君	田	高	紫	君
武	君	君	君	高	君	高	義	已	君	高	堤	左	君
高	之	君	君	高	一	近	光	藏	君	堤	明	宅	君
戶	君	君	君	富	君	中	宏	治	君	中	本	竹	君
內	君	君	君	長	君	西	道	郎	君	服	部	企	君
根	君	君	君	野	君	林	色	彌	君	比	井	虎	君
馬	君	君	君	萩	君	一	井	三	君	藤	松	太	君
平	君	君	君	廣	君	藤	本	一	君	松	森	次	君
福	君	君	君	松	君	松	武	明	君	山	下	君	君
箕	君	君	君	村	君	武	山	守	君	山	谷	君	君
山	君	君	君	山	君	山	吉	正	君	吉		君	君
安	之	輔	君	吉	守	吉		誠	之			次	君

渡安伊今稱緒岡片河水小佐清篠鈴瀨高立土中長原福松村矢鬼青石小謙櫻小後佐島弄谷陳富長	邊遠藤井稱緒岡片河水小佐清篠鈴瀨高立土中長原福松村矢鬼青石小謙櫻小後佐島弄谷陳富長	芳又權方桐八三右信代誠儀義時一達達太康德佐三金三盛部幸龍俊登增永發光嶺	幸允君吉潔君衛最君元君十君七君一君治君輔君天君雄君俊君也君二君秋君松君安君作君那君一君保君治君策君一君能君弘君襟君儀君要君	荒安伊今石小神川柏北小佐下白鈴田高塚德中內峰藤松宮森山天猪伊岡河金小古佐柴高津成永	木藤藤村非山坂上谷村泉藤村石木島橋田重村藤須崎田司伊草口藤本野井坂賀藤田木橋田瀨	忠勝孝政武猛三太次鴻村泉健善不重豐寅良正卓鼎賀兼八眞三盛理喜治愛好久常直堅正	義喜治行一君三君那君那君研君造君那君生君英君三君親君那君昭君藏君澄君那君長君德君藏君輔君香君進君六君道君讓君等君喬君那君	苑青伊今大小金河何工兒佐下柴末田高塚遠中永日福松宮山與阿伊椴大金清小佐佐清田寺長中	川柳藤村澤川濶瀨島羽田廣代田精村伊育武俊房本岩清正慎武忠春章之乙岩金三太	惠貞代次悅之治壽藤重內尾庄周佐太之育武俊房本岩清正慎武忠春章之乙岩金三太	助世治那助君介那君祥茂那君那君正介市那君繁助君夫一君正助君峻爾君紀樹吾君雄君吾君助君吉那君那君	阿粟今池大垣河水小金清重鈴野高高辻常中野平松松山吉芥石遠小勝木小皿佐炭武辰友中難	部根村橋田見野代西野水森木川橋井上木田石見川松谷呂村々窺內野松野波	仁信泰厚田野代西野水森木川橋井上木田石見川松谷呂村々窺內野松野波	一信泰厚田野代西野水森木川橋井上木田石見川松谷呂村々窺內野松野波	那行清那那那君一君藏君七君久君鐵君助君丸君介君助君積君春君太君嚴君平君隆君潔君那君那君一君那君那君明君一君
---	---	-------------------------------------	---	---	--	--	--	---	--------------------------------------	--------------------------------------	---	--	-----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	---

保君 三武 久君 眞君 太郎 也君 一君 介君 周君 礪君 記君 志君 雄君 武君 造君 見君 藏君 一君 治君 薰君 夫君 平君 亮君 郎君 美君 德君 彦君 常君 三君 助君 一君 太君 晴君 郎君 惠君 吉君 作君 壽君 直君
部勝野 比城 吉雄 幸二 本勝 保來 井英 初代 秀勝 茂勝 奧宅 貞重 盛一 廣一 知三 憲三 泰治 末孝 久直
服原 日深 正諸 森山 綿池 奥叶 櫻田 土成 濱藤 前松 信淺 入川 小佐 清助 立長 西堀 森吉 阿青 大總 加黑 佐志

太郎 次君 吉二 敏平 之夫 二勝 郎夫 朝一 吉郎 一夫 亮輔 門助 巽雄 郎一 君次 君潮 助夫 郎一 君一 君一 君明 市君 義君
亮俊 淺健 英毅 義芳 劍繁 三久 安康 外保 太義 愛幸 左衛 喜之 武太 元亮 一啓 正一 美清 會佐 雅
田鎌 谷原 尾成 卷田 川部 松坂 中井 藤伸 井威 尾邊 部龍 生員 水喜 崎川 生所 田富 川部 木林 山與 地城 島
原幡 菅藤 松光 森八 吉姉 岡兼 小田 武內 原平 照松 渡阿 飯瀨 小笹 清住 高中 丹別 森吉 阿青 打片 加菊 三島

資君 五里 之君 剛君 吉君 藏君 德君 一君 雄君 勤君 郎君 清君 雄君 治君 孝君 道君 平君 三君 勝君 田君 愿君 二君 藏君 助君 義君 敏君 作君 一君 郎君 郎君 一君 長君 雄君 一君 男君
弘愨 千範 三利 辨知 高二 傳良 中安 次矢 猛三 島至 林健 香重 品松 英忠 鑿友 範忠 清次 熊兵 三源 輝政 準俊
山崎 山田 清山 田木 倉原 岩村 中水 川矢 島川 部野 品松 木橋 安問 澤山 中後 岡村 川地 林野
西濱 檜福 増見 森八 興安 上兼 木田 高中 野林 福松 吉阿 稻大 桑蔡 重鈴 高富 中廣 丸山 永赤 內岡 桂菊 小佐

民君 一明 吾爾 男次 郎君 雄爾 二吉 時昭 喜君 一宏 吉三 郎一 男忍 一藏 策君 正門 部夫 武君 禮君 雄平 白君 八君 芳君 嗣君 郎君
清政 平勝 久煥 貞兼 郁準 萬護 太昭 淺延 敬末 正天 次亮 石千 俊和 左衛 民三 瀨耕 博好 秀治 芳代 嗣君
野部 塚光 淵久 田本 木井 野戶 沼陸 田川 谷村 口本 源藤 野勝 賀藤 木千 俊和 左衛 民三 瀨耕 博好 秀治 芳代 嗣君
西服 平福 増町 森山 四淺 磯河 貝庄 高中 西長 二牧 山安 安海 川古 佐鈴 杉千 中原 松鏡 陸有 今大 勝菊 桑櫻

白田	石中	鐵幸	藏吉	君君	杉田	江中	甚憲	吉造	關田	定中	三正	那次	君君	曾田	根中	正民	實夫
高桑	桑山	綱勝	吉一	君君	戶野	澤順	憲耿	造介	年中	光村	正十	次一	君君	中濱	中山	民純	夫一
中原	山田	田勝	一君	君君	馬場	野越	順宗	耶郎	廣川	嘉憲	米二	三耶	君君	藤前	田波	文謙	君二
福町	岡田	元實	君君	君君	堀三	島平	一武	君君	北溝	條江	次四	男耶	君君	椋本	川修	謙正	君正
宮山	崎崎	亮憲	君君	君君	村山	山下	之助	君君	矢吉	崎岡	欣平	耶吉	君君	矢野	永井	應整	君君
波新	井文	太藏	君君	君君	相阿	澤部	一純	君君	安安	藤達	太秀	男耶	君君	新伊	東山	孫辰	君君
井小	川清	亮次	君君	君君	市岡	川崎	保圓	君君	今大	泉佳	貞干	耶治	君君	內大	野澤	金謙	君君
岡河	津成	萬治	君君	君君	小神	谷島	國良	君君	大小	迫武	之幸	城助	君君	大北	林藤	貞秀	君君
紀小	島水	大長	君君	君君	來後	藤藤	安飲	君君	小佐	林清	岩次	治吉	君君	佐末	木喜	勝德	君君
雜鈴	賀木	敬潔	君君	君君	進鼠	入田	豐不	君君	陶園	山沼	類忠	耶實	君君	竹高	中理	喜三	君君
田富	澤原	脩紀	君君	君君	爲長	峰見	孫喜	君君	田南	沼崎	初太	君君	君君	西野	村野	捷重	君君
西林	堀口	多志	君君	君君	新八	尾本	卯伊	君君	沼地	田川	七與	耶藏	君君	平三	山田	木敬	君君
堀森	志野	常光	君君	君君	堀森	本見	伊積	君君	右山	根利	長喜	耶一	君君	山矢	賀尾	部真	君君
矢吉	上方	敬長	君君	君君	安吉	越前	谷正	君君	山橫	小田	三盛	耶吉	君君	苑小	田保	一平	君君
井緒	村兵	之幸	君君	君君	川岸	本藤	董幸	君君	加楠	川木	嘉福	耶一	君君	久高	野矢	興隆	君君
北近	藤島	士太	君君	君君	佐武	本岡	光太	君君	鈴富	林銅	之雄	君君	君君	中長	谷下	川幸	君君
田林	川木	範太	君君	君君	橋山	本藤	末秀	君君	原藤	島部	一雄	君君	君君	松吉	岡藤	計政	君君
深正	林春	太義	君君	君君	安池	野幸	恒清	君君	矢阿	崎他	二義	君君	君君	伊薄	久山	保健	君君
若伊	川森	義要	君君	君君	岡草	川直	清直	君君	小岡	藤原	國憲	君君	君君	大鏡	古水	開政	君君
居大	野野	清治	君君	君君	柴田	直光	直光	君君	岡藤	原國	憲憲	君君	君君	清古	水政	實實	君君

鈴高西藤馬森渡小河北清中日本山字北本山伊關船鷺河藤櫻木長坂佐關田大湯金城中樵田白加小	水田原道俊清照惣三熊正官五清木正千緇綱貫寅義正盛左川部崎一誠幸熊佐太一兼重都照大	龍廣正孫俊清照惣三熊正官五清木正千緇綱貫寅義正盛左川部崎一誠幸熊佐太一兼重都照大	雄廣正孫俊清照惣三熊正官五清木正千緇綱貫寅義正盛左川部崎一誠幸熊佐太一兼重都照大	君人七君逸夫君作雄平君一君藏君作君孝君夫君時君那君夫君一君雄七君美君二君夫君明君	菅高新福水山和氣山小川小白中藤村東柿齋松渡尾中宮森北堀清喜諸野瀬柴山羽伏森岡石下齋工柏小	井田新福水山和氣山小川小白中藤村東柿齋松渡尾中宮森北堀清喜諸野瀬柴山羽伏森岡石下齋工柏小	留善名井野本氣山小川小白中藤村東柿齋松渡尾中宮森北堀清喜諸野瀬柴山羽伏森岡石下齋工柏小	治善卯井野本氣山小川小白中藤村東柿齋松渡尾中宮森北堀清喜諸野瀬柴山羽伏森岡石下齋工柏小	耶藏太越之次後通虎啓恒良藤浦邊古竹本原內水權岡悅川明成信左鶴義朴榮清喜	君藏太越之次後通虎啓恒良藤浦邊古竹本原內水權岡悅川明成信左鶴義朴榮清喜	立垂菽藤水山飯岡北齊立長藤森磯梶佐森相黑中八伊木森管兒山越小五小梅重小田柳川尾伊藏	川水原野谷木田川藤花屋枝坂野浦薙岡原村尋藤庭山原玉崎智川島早津本林口山村尾伊藏	大輝官嘉一鑄君弘君治君彦君一君菊孫九金正益之確清之清桂正文貞理滿庄正常一德長	市治六君鑄君弘君治君彦君一君菊孫九金正益之確清之清桂正文貞理滿庄正常一德長	辰中不町南和內小水齋寺久武山確梶仲柳新澤永吉岡恒有苑住和脊佐高穉黑森張島濱太橫瀧櫻加	村垣破田田田谷村尾井恒澤田山山谷田非田丸崎田木田掛竹坂田田昌野地田庭蘇	國壽義弘宗莊富政壹英源太水淺次已梅田橫敬文治田清重光征利靜利貞辰圓雄秀謙聰	治君親君知君毅君吉君一君雄君衛君岐君雄君廣君一君誠君光君夫君清君年君黃君治君三君平君那君義君三君支君光君一君熙君助君治君造君三君
--	--	--	--	--	--	--	---	---	-------------------------------------	-------------------------------------	---	---	--	---------------------------------------	--	-------------------------------------	---------------------------------------	--

田黑成安後中今川島堀泉清寺濱三浪鮫田古	中木瀨藤尾井上田內水島本橋平島中川	種正一光收善太三琢齊寬貞長朝	雄君成君坦君信君哲君治君稻君保君那君藏君治君肅君之君茂君吉君時君	船山保川後山伊絹永水海田富浮大門谷奧	山原藤田茂笠井野保代多洲村司口村	晴禎正米量安利半正鈺瑞傳四武成舜	雄君三君明君男君介君三君三君藏君路君亨君穗君吾君實君耶君久君之君造君	中宮國齊吉井後原安鎌田林福天三上古	原林本富藤岡下藤部田隆英辰修義一	壽廣茂由甚吾勝久一邦章治夫雄藏除耶	耶君二君太君治君一君藏君吉君道君亮君治君夫君修君	新德春小坂秋小猿濱石喜杉速中白引青	井善藤林田山川谷田崎多之水村野崎野	俊君光君三君市君人君夫君磨君太君一君實之三君照君雅君通君
---------------------	-------------------	----------------	----------------------------------	--------------------	------------------	------------------	------------------------------------	-------------------	------------------	-------------------	--------------------------	-------------------	-------------------	------------------------------

准員大正十五年度第三期分會費

金參圓	蓮沼弘喜君	東海林誠君	太田圓藏君
金貳圓	菊地千代三君	中山光治君	關口房敬君
金壹圓	渡邊甲君		

准員昭和二年度第一期分會費

金四圓	藤井虎男君	氏家文彌君	松原祐一君
水村芳男君	安齋榮君	小川喜七君	中原壽一君
原壯之君	新井止耶君	今井哲君	櫻井盛男君
上田政義君	三島修藏君	吉田稔男君	關口房敬君
金貳圓	菊地千代三君		
金壹圓	太田圓藏君	古川朝時君	

准員昭和二年度第二期分會費

金四圓	出井泰三耶君	木村芳男君	安齋榮君
小川喜七君	中原壽一耶君	原壯之君	今井哲君
上田政義君	新井止耶君	吉田稔男君	關口房敬君

准員昭和二年度第三期分會費

金四圓	木村芳男君	小川喜七君	中原壽一耶君
原壯之君	上田政義君	新井止耶君	吉田稔男君
金貳圓	安齋榮君		

學生員大正十三年度第三期分會費

金貳圓五拾錢	福西正雄君
--------	-------

學生員大正十四年度第三期分會費

金壹圓貳拾五錢	田邊里市君
---------	-------

正 誤 及 追 加

(第十三卷第一號所載)

VERDREHUNGSVERSUCHE MIT UNBEWEHRTEN UND BEWEHRTEN BETONKÖRPERN

Von Takenosuke Miyamoto, Mitglied.

BERICHTIGUNG

- S. 20, die letzte Zeile, lies "zweiten" statt "ersten".
- S. 24, Zeile 2, lies "ersten" statt "zweiten".
- S. 37, Zeile 10-11, lies "ihres End" statt "ihren Anfang".
- S. 37, Gl. (4)

$$\left. \begin{aligned} \tau_1 &= \frac{1.933}{\pi} \frac{M_n^{(1)}}{r^3} \\ \tau_1 &= \frac{1}{[0.5172 - 0.5860 m^4 + 0.0688 m^5] \pi} \frac{M_n}{r^3} \end{aligned} \right\} \dots\dots(4)$$

- S. 37, die Fussbemerkung 1) soll wie folgt berichtigt werden.

Bezeichnet man in der nachstehenden Abbildung mit

- ρ den Abstand des beliebigen Punktes von der Stabachse,
- ρ_0 eine gewisse Grenze von ρ , bis zu der hin das Hookesche Elastizitätsgesetz gilt,
- τ die Schubspannung für den Abstand ρ , und
- τ_0 dieselbe für den Abstand ρ_0 ,

dann besteht der folgende Zusammenhang

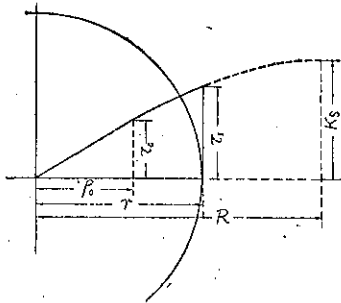
$$\left. \begin{aligned} \tau &= G\theta\rho, & \rho \leq \rho_0 \\ \tau &= G\theta\rho - K\theta^n(\rho - \rho_0)^n, & \rho \geq \rho_0 \end{aligned} \right\} \dots\dots(i)$$

worin K und n die dem betreffenden Stoffe eigentümlichen Konstante sind, die nur durch die Versuchsergebnisse bestimmt zu werden bleiben. Zwischen der Spannung und der Verschiebung bei den spröden Materiallien wie Beton, besteht das Hookesche Gesetz nicht im strengen Sinne vom Belastungsanfang an. Das ist, man kann in Gl. (i) einsetzen

$\rho_0 = 0$, oder

$$\tau = G\theta\rho - K\theta^n\rho^n \dots\dots(ii)$$

Auf Grund der vorhergehenden Versuchsergebnisse von Bach, Talbot und anderen Ausführem, kann man näherungsweise in Gl. (ii) einsetzen $K=G$, und $n=2$, daraus erfolgt



$$\tau = G\theta\rho(1-\theta\rho) \dots\dots\dots(iii)$$

Diese Gleichung bezeichnet ohne weiteres eine Parabel, die am Punkt worin $\rho=R=1/2\theta$ ihren Scheitel hat, und dessen Scheitel den grössten Wert der Spannung gibt, d. i., $\tau_{max} = G/4$.

Diese Spannung kann man annehmen, zur Schubfestigkeit des Betons gleich zu sein, oder

$$K_s = \tau_{max} = \frac{1}{4}G = G\theta R(1-\theta R),$$

und daraus kommt

$$\tau = \frac{K_s}{R^2}(2R-\rho)\rho \dots\dots\dots(iv)$$

Mittels dieser Gleichung erhält man

$$\tau_1 = \frac{K_s}{R^2}(2R-r)r \dots\dots\dots(v)$$

Setzt man hierbei $\tau_1 = \xi K_s$ ein, so wird Gl. (v)

$$\xi R^2 - 2rR + r^2 = 0$$

$$\therefore R = \frac{1}{\xi}(r + \sqrt{r^2 - \xi r^2}) = \frac{r}{\xi}(1 + \sqrt{1 - \xi}) \dots\dots\dots(vi)$$

Für den kreisförmigen Querschnitt wird die Berechnung wie folgt fortgeführt:

$$\begin{aligned} M_d &= \int_0^r \tau \cdot 2\pi\rho \cdot \rho \cdot d\rho = -\frac{2\pi K_s}{R^2} \int_0^r (2R-\rho)\rho^2 d\rho \\ &= -\frac{2\pi\xi\tau_1 r^3}{(1+\sqrt{1-\xi})^2} \left[\frac{1+\sqrt{1-\xi}}{2\xi} - \frac{1}{5} \right] \\ &= \frac{\pi}{5} \frac{3+2\sqrt{1-\xi}}{1+\sqrt{1-\xi}} \tau_1 r^3 \end{aligned}$$

$$\therefore \left. \begin{aligned} M_d &= \frac{C\pi}{5} \tau_1 r^3 \\ C &= \frac{3+2\sqrt{1-\xi}}{1+\sqrt{1-\xi}} \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(vii)$$

Für den kreisringförmigen Querschnitt erhält man in der ähnlichen Weise die nachstehende Folge:

$$\begin{aligned} M_d &= \frac{2\pi K_s}{R^2} \int_{r_0}^r (2R-\rho)\rho^2 d\rho \\ &= \frac{2\pi\xi\tau_1 r^3}{(1+\sqrt{1-\xi})^2} \left[\frac{1+\sqrt{1-\xi}}{2\xi} (1-m^4) - \frac{1}{5} (1-m^5) \right] \\ &= \frac{\pi}{5} \left[\frac{3+2\sqrt{1-\xi}}{1+\sqrt{1-\xi}} - \frac{5m^4}{1+\sqrt{1-\xi}} + \frac{2\xi m^5}{(1+\sqrt{1-\xi})^2} \right] \tau_1 r^3 \end{aligned}$$

$$\left. \begin{aligned} \therefore M_d &= \frac{C_1\pi}{5} \tau_1 r^3 \\ C_1 &= C - Am^4 + Bm^5 \\ A &= \frac{5}{1+\sqrt{1-\xi}}, \quad B = \frac{2\xi}{(1+\sqrt{1-\xi})^2} \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(viii)$$

Die Werte der Koeffizienten C in Gl. (vii) und A, B in Gl. (viii) verändern sich wie folgt:

Verdrehungsversuche mit Unbewehrten und Bewehrten Betonkörpern

ζ	1.00	0.75	0.50	0.25
r/R	1.000	0.500	0.293	0.134
C	3.000	2.667	2.586	2.536
A	5.000	3.333	2.930	2.680
B	2.000	0.667	0.344	0.144

$\zeta=0$ gibt $C=2.5$ und $C_1=2.5(1-m^4)$, und also stimmen Gl. (vii) und (viii) mit Gl. (2) in S. 36 überein. Zunächst ist es eine Frage wie gross die Koeffizienten C und C_1 vorzusetzen. Bei den Versuchen von Graf, 1921, wurden die folgenden Werte ermittelt oder ausgerechnet:

K_s =rd. 31 kg/qcm durchschnittlich, und

τ_1 =rd. 16 kg/qcm für den kreisförmigen Querschnitt,

=rd. 13 kg/qcm für den kreisringförmigen Querschnitt.

Aus diesen Ergebnissen kann man ohne wesentlichen Fehler für das Bruchmoment annehmen $\zeta=1/2$. Das entspricht zu $r/R=0.293$, und stimmt mit zuverlässiger Genauigkeit mit der Annahme $r/R=1/4$ von Talbot in Bezug auf die parabolische Formel im Balkenquerschnitt. Aus dieser Annahme ergibt sich

$$\left. \begin{aligned} M_a &= 0.5172 \pi r_1 r^3 \\ M_a &= [0.5172 - 0.5860 m + 0.0688 m^5] \pi r_1 r^3 \end{aligned} \right\} \dots \dots \dots (ix)$$

oder

$$\left. \begin{aligned} \tau_1 &= \frac{1.933}{\pi} \frac{M_a}{r^3} \\ \tau_1 &= \frac{1}{[0.5172 - 0.5860 m^4 + 0.0688 m^5] \pi} \frac{M_a}{r^3} \end{aligned} \right\} \dots \dots \dots (x)$$

Gl. (ix) und (x) sollen eigentlich für das Bruchmoment angewendet werden, und nur näherungsweise können sie für das niedrige Moment gebraucht werden.

S. 38, Zusammenstellung 35, die letzte Reihe,

lies	statt
100 100	110 600
182 000	201 100
208 000	229 800
82 800	88 100
137 600	146 000

S. 38, Zeile 11 von unten

$$\tau_1 = \frac{1.933}{\pi} \frac{120\ 860}{15.00^3} = 22.0 \text{ kg/qcm}$$

S. 38, Zeile 8 von unten

$$\tau_1 = \frac{1.933}{\pi} \frac{98\ 400}{14.97^3} = 18.0 \text{ kg/qcm}$$

S. 39, Gl. (6)

$$\left. \begin{aligned} \tau_1 &= G\theta r(1-\ell r), & G &= \frac{\tau_1}{\theta r(1-\theta r)} \\ \tau_1 &= \frac{1.933}{\pi} \frac{M_a}{r^3}, & G &= \frac{1.933}{\pi} \frac{M_a}{\ell r^4(1-\ell r)} \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(6)$$

S. 39, Zusammenstellung 36

Reihe 2		Reihe 4		Reihe 6	
lies	statt	lies	statt	lies	statt
3.6	3.3	161 000	146 900	150 000	137 800
7.3	6.6	157 000	142 100	147 500	133 600
10.9	9.9	143 300	136 500	134 600	122 500
14.6	13.3	143 000	120 600	118 700	111 600
18.2	16.6	134 800	122 400		

ZUSATZ

Die folgende Zeilen sollen am Ende des Paragraph 46 eingesetzt werden.

Die Eisenbeanspruchung beim Riss bzw. Bruch in der Zusammenstellung 37 bzw. 38 gilt ausschliesslich für die Vergleichung der verschiedenen Bewehrungen, eingelegt in den auf Torsion beanspruchten Betonkörpern, während sie mit der tatsächlichen Spannung des Eisens nicht verglichen werden kann, die bei unseren Versuchen nicht ausgemessen worden ist. Hinsichtlich dieses Punktes sind die Versuche zwar unvollkommen; der Hauptzweck des Verfassers war aber die Prüfung der Zuverlässigkeit der Gleichungen (7) bis (17) für die Berechnung der auf Torsion beanspruchten Eisenbetonkörper. Insofern es sich um diesen Punkt handelt, ist der Versuchszweck des Verfassers ganz erreicht worden. Die Ergebnisse werden unten numerisch zusammengestellt werden.

Bei der Berechnung des Eisenbetonkörpers ist die Zugfestigkeit des Betons gewöhnlich ausser acht gelassen zu werden, und darum sollen Gl. (8) bis (10), (15) bis (17) in der folgenden Weise umgebildet werden, um das Höchstmoment, das unter zulässiger Spannung in der Bewehrung entwickelt werden kann, zu berechnen.

Für die Körper in Reihe 2, 5 oder 6, aus Gl. (8) ergibt sich

$$M_a = 1.414 \sigma_e z r_1 f_c \dots\dots\dots(i)$$

für die Körper in Reihe 3 oder 4, aus Gl. (9)

$$M_a = \sigma_e z r_1 f_c \dots\dots\dots(ii)$$

für die Körper in Reihe 7 oder 8, aus Gl. (16) bzw. (15)

$$M_a = 1.733 \sigma_e z r_1 f_c \dots \dots \dots (iii)$$

für die Körper in Reihe 9, aus Gl. (10)

$$M_a = 2 \sigma_e z r_1 f_c \dots \dots \dots (iv)$$

und für die Körper in Reihe 10 oder 11, aus Gl. (17)

$$M_a = 1.414 \sigma_e r_1 f_c \left[z_1 + z_2 \left(\frac{r_2}{r_1} \right)^2 \right] \dots \dots \dots (v)$$

In der nachstehenden Zusammenstellung bedeutet

M_a Rissbildungsmoment,

M'_a Bruchmoment, beide beobachtet bei den Versuchen, und

M_0 Höchstmoment entwickelt unter der zulässigen Spannung der Bewehrung $\sigma_e = 1\ 000$ kg/qcm.

Körper in Reihe	berechnetes Moment M_0	Rissbildungsmoment		Bruchmoment	
		M_a	M_a/M_0	M'_a	M'_a/M_0
2	38 600	141 600	3.67	191 900	5.03
3	19 500	137 900	7.07	189 250	9.71
4	35 100	131 300	3.74	177 850	5.07
5	38 600	144 400	3.74	201 050	5.21
6	38 600	159 850	4.14	209 800	5.44
7	33 790	141 800	4.20	201 200	5.95
8	60 830	151 950	2.49	208 600	3.43
9	78 000	120 750	1.55	135 130	1.73
10	52 390	149 000	2.84	249 850	4.77
11	52 390	150 000	2.86	263 800	5.04
bei Versuche von Graf (1)	192 800	270 000	1.40	(700 000)	3.63

Aus diesen Ergebnissen wird es bemerkt dass, alle unsere Formeln, ungeachtet einige ausnahmen, mit der Sicherheitskoeffizient grösser als 3 benutzt werden können; d. i., kein Riss findet auf die Oberfläche des Betons unter dem zulässigen Höchstmoment statt. Um die Vergleichung wurde Gl. (i) für die Körper bewehrt mit Spiralen bei Versuche von Graf angewendet, und sie zeigte hier auch ein zufriedenes Ergebnis.

In der obigen Zusammenstellung bedeutet M_a/M_0 den Sicherheitskoeffizient der berechneten Körper, und ist es klar dass, je grösser dieser Koeffizient, desto sicherer der Körper. Gleichzeitig muss die Eisenmenge darin aber in Betracht gezogen werden. In den Körpern in Reihe 5 bis 9, oder in Gruppe B ist ungefähr 2-mal Eisenmenge im Vergleich zu denselben in Reihe 2 bis

4, oder in Gruppe A verwendet; und ferner in denselben in Reihe 10 bzw. 11, 1.7- bzw. 2.9-mal Eisenmenge.

Aus diesem Standpunkt gesehen, sind die Bewehrungsarten wie in Gruppe A, oder Einfachspiralen erstens empfiehlt zu werden, worunter 60°-Spiralen in Reihe 3 wahrscheinlich am besten sind. Hier muss es aber ins Gedächtnis zurückgerufen werden dass, obgleich 60°-Spiralen am stärksten beansprucht werden können, je grösser der Schraubenwinkel β , desto mehr die Eisenmenge für die Einheit der Körper, und dass, wenn die gleiche Eisenmenge wie 45°-Spiralen verwendet wird, sich kleineres Rissbildungs- bzw. Bruchmoment ergibt, wie schon gesehen.

Im kurzen, können unsere Formeln mit genügender Sicherheit für die Berechnung der wirklichen Körper verwendet werden, und unter allen anderen ist 45°-Spiralbewehrung meistens ökonomisch und wirksam.

(Schluss)